『カルナク仏教史』
― その成立事情と歴史的位置付けについて ―

西沢　史仁

序：

『カルナク仏教史』（*mKhar nag chos ’byung*）は，正式には，『ガンデン仏教史・如意樹・賢者を歓喜させるもの』（*dGa’ ldan chos ’byung dpag bsam sdong po mkhas pa dgyes byed*）と称し[1]，カルナク翻訳師ペルジョルギャンツォ（mKhar nag lo tsā ba dpal 'byor rgya mtsho）により，十七世紀頃に著作されたゲルク派史である[2]．これは，『アク稀覯書目録』にも記載されているが[3]，これまで余り注目されたことのない史書であり，研究もまだ殆ど進んでいない[4]．筆者の分析によれば，『黄瑠璃史』（*dGa’ ldan chos ’byung vaiḍūrya ser po*）と多くの構成上及び字句上の対応関係が

---

[1] 『カルナク仏教史』の書名は，奥書には明記されておらず，現行の活字本の表題には，dGa' ldan chos 'byung dpag bsam sdong po mkhas pa dgyes byed dang mtshan byang gzhan mKhar nag chos 'byung zhes bya ba bzhugs so（『ガンデン仏教史・如意樹・賢者を歓喜させるもの』，及び，他の御名は『カルナク仏教史』と云われるもので御座います）と記されており，『カルナク仏教史』という通称も表題中に併記されている．著者自身が自らの著作を，自らの名前の一部を取って『カルナク仏教史』と称することはまずあり得ないので，これが後代の付加であることはほぼ疑いないが，問題は，この前半部の書名までもが後代の付加であるのか，あるいは，著者自身によるものなのかという点である．実は，『カルナク仏教史』の書名については，伝承に乱れが確認されており，例えば，『黄瑠璃史』や『ドメ仏教史』にはこう記されている．

- mKhar nag lo tsā ba'i dGa' ldan chos 'byung dpag bsam ljon shing［『黄瑠璃史』p. 517.9f.］
- mKhar nag lo tsā ba'i dGe ldan chos 'byung dpag bsam ljon po［『ドメ仏教史』p. 3.23f., cf. Martin 1997, p. 96］

『トゥンカル稀覯書目録』p. 217 には，後者の書名で記載されているが，フォリオ数等の書誌情報が明記されていないので，恐らくはこの『ドメ仏教史』等からの孫引きであろう．ここでは，暫定的に dGa' ldan chos 'byung dpag bsam sdong po mkhas pa dgyes byed という書名を，カルナク翻訳師自身による正式なものと解釈しておくが，この点は今後の検討課題である．

[2] テキスト状況としては，隠字体（bskung yig）で記されたウメ書体の写本が一本（TBRC no. W18611, 1-102b6），活字本（文献表参照）が一本利用可能である．これとは別に，ロンドルラマは，99 フォリオからなるテキストを記録している．

> 'Ol dga' rdzing phyi ba mKhar nag lo tsā [ba] dpal 'byor rgya mtsho'i dGa' ldan chos 'byung la dgu bcu go dgu/（『新旧カダム派全集目録』p. 604.9-10 = MHTL no. 15800, cf. Martin 1997, p. 96.）

このテキストの現存は未詳である．本稿においては，このうち活字本を依用する．

[3] MHTL no. 10854: mKhar nag lo tsā ba'i dGa' ldan chos 'byung.

[4] 先行研究としては，Dan Martin による簡略な解題（Martin 1997, p. 96）がある程度である．

Acta Tibetica et Buddhica 9: 191-223, 2016.
© Faculty of Buddhism, Minobusan University, JAPAN

確認され,『黄瑠璃史』と極めて密接な関係にあることが判明している．実際,『黄瑠璃史』は, その奥書によれば, レチェン・クンガーギェルツェン（Las chen kun dga' rgayl mtshan, 15 世紀）の『カダム明灯史』（*bKa' gdsams gsal ba'i sgron me*），パンチェン・ソナムタクパ（Paṇ chen bsod nams grags pa, 1478-1554）の『新旧カダム史』（*bKa' gdams gsar rnying gi chos 'byung yid kyi mdzes rgyan*），そして，この『カルナク仏教史』を元本として，それにさらに諸情報を追加して著作されたが[5]，その中でも，特に，この『カルナク仏教史』の影響が強い．『黄瑠璃史』は，周知のように，ダライラマ五世ガワンロプサンギャンツォ（rGyal ba ngag dbang blo bzang rgya mtsho, 1617-1682）の摂政を務めたデスィ・サンギェギャンツォ（sDe srid sangs rgyas rgya mtsho, 1653-1705）により著された浩瀚なゲルク派史であり，特に，チベット全土のゲルク派の諸寺院の寺統を包括的に収拾した著作として知られている．それは，ゲルク派の寺院及び寺統史の基礎的資料として，極めて資料的価値が高いものであるが，今回紹介するこの『カルナク仏教史』は，この『黄瑠璃史』の主要な情報源の一つとなっており，その意味で，注目に値する文献である．本稿においては，筆者が今後予定している『カルナク仏教史』及び『黄瑠璃史』の包括的研究に向けての予備的作業として,『カルナク仏教史』の成立事情とその歴史的位置付けについて，考察することにしたい.

カルナク翻訳師ペルジョルギャンツォについて ― その年代と著作 ―：

『カルナク仏教史』の著者であるカルナク翻訳師ペルジョルギャンツォについては，その伝記資料が得られないので，詳しい事績は知られていない．ロンドルラマ（Klong rdol ngag dbang blo bzang, 1719-1795）は，単に，ダライラマ五世よりも少し前の人物と言及しているが[6],『カルナク仏教史』の活字本校訂者によれば，カルナク翻訳師は，十六世紀末頃，ニェタンのカルナク（sNye thang mKhar nag）に生

[5] 『黄瑠璃史』p. 517.8-10 参照.

[6] この箇所は，版本により異読が見られる．底本とした活字本では，この箇所は，「ダライラマ五世の時代に現れたオルカ・カルナク翻訳師のガンデン仏教史（rGyal ba lnga pa'i skabs su byon pa'i 'Ol kha mkhar nag lo tsā'i dga' ldan chos 'byung）」と記されているが（『新旧カダム派全集目録』p. 632.19-20），シャタピタカ本やそれを底本とする MHTL では，「ダライラマ五世の少し前に現れた・・・（rGyal ba lnga pa'i gong tsam du byon pa'i ...）」と記されている．シャタピタカ本 p. 1408.2; MHTL no. 16391 参照．内容的に微妙な違いが見られるが，後述するように，カルナク翻訳師は，基本的にダライラマ四世の時代の人物なので，シャタピタカ本の読みを取っておく.

誕し，若い頃に出家して，サンプ寺（gSang phu）等で修学を積んだ者とされる[7]．その典拠が明示されていないので，如何なる情報源に基づくのかは不明であるが，ただ状況から判断して，恐らくは本書の内容それ自体を資料としてそのように推定したのであろう．カルナク（mKhar nag）とは，『バシェー』にも見出されるニェタンの一地方の古名であり[8]，恐らくは，カルナクの地の出身の故に，カルナク翻訳師と称されるものと思われる．他方，ロンドルラマは，カルナク翻訳師を，「オルガのジンチの人（'Ol dga'/kha rDzing phyi ba）」と称しているので[9]，その点を如何に解釈すべきかが問題となっているが，これは，カルナク翻訳師の出身地を示したものではなく，出身寺院を示したものと捉えておきたい．

ジンチ寺（rDzing phyi）はオルガに存する古刹であり，伝承によると，教法後伝期の戒律復興運動に主導的な役割を果たしたかのラチェン・ゴンパラプセル（Bla chen dgongs pa rab gsal, 892-975）が，ガルミ・ユンテンユンドゥン（Gar mi yon tan g-yung drung）にコータン国から招来した弥勒像を託し，ウーツァンの地に遣わして，仏教流伝に資するようにとの請願のもとに建立されたものである[10]．当初は特定の宗派に帰属するものではなかったが，その後衰微し，ツォンカパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357-1419）が修復を加えたことを機縁として，ゲルク派へ帰属するようになったと伝えられる．その寺統は，『カルナク仏教史』にも掲載されているが，他の一連の寺院に比べると，かなり詳しい内容を含んでおり，さらに，注目すべきは，その解説には，「最近（deng sang）」や「現在（da lta）」の状況が記されていることである[11]．このことは，カルナク翻訳師が，同寺の最新の事情に通じていたことを示唆している．カルナク翻訳師がジンチ寺出身者であるならば，良くわかる話である．

カルナク翻訳師の師弟関係については，『カルナク仏教史』の文中に，自身で，サンプ寺の下院法主クンチョクチューペル（Gling smad chos rje dkon mchog chos

---

[7] 『カルナク仏教史』序文（mdzad pa po'i rnam thar）p. 1 参照．

[8] 『バシェー』p. 90.10f.（津曲 2011, p. 225）参照．そこでは，パドマサンバヴァが入蔵し，ニェタンに向う際の記述に，「カルナクの湖（mKhar nag gi mtsho）」で龍を調伏するというエピソードが見られる．このカルナク湖については，『トゥンカル大辞典』p. 432 参照．

[9] 『新旧カダム派全集目録』pp. 604.9, 632.20（MHTL nos. 15800, 16391）参照．この件は Martin 1997, p. 96 に既に指摘されている．

[10] ジンチ寺の寺統については，『カルナク仏教史』pp. 150-153：『黄瑠璃史』p. 191f.参照．

[11] 『カルナク仏教史』pp. 150.6, 151.5, 151.11 参照．

'phel, 1573-1646）に師事して，勝楽（bDe mchog, Saṃvara）の灌頂等を受けた旨を明記しているので[12]，その直弟子に当たることは疑いない.『カルナク仏教史』の活字本校訂者は，恐らくはこのことを念頭において，カルナク翻訳師がサンプ寺で修学したと推定したのであろう．但し，このクンチョクチューペルという人物は，後述するように，非常に多くの寺院の座主を歴任した人物であり，実はジンチ寺もその中の一つである．さらに，後述するように，勝楽の灌頂等を授かったのは，サンガクカル寺（gSang sngags mkhar）の寺統の箇所で触れられていることから，サンプ寺ではなく，サンガクカル寺でのことであった可能性がむしろ高い．それ故，カルナク翻訳師がサンプ寺で修学したことを示す資料的証拠は少なくても現時点では確認できないのである.

カルナク翻訳師の正確な年代は知られていないが，下院法主クンチョクチューペル（1573-1646）の直弟子であることが一つの大きな目安となる．大まかには，下院法主クンチョクチューペルより年少の同時代人と考えてよかろう．後述するように，ダライラマ四世ユンテンギャンツォ（rGyal ba yon tan rgya mtsho, 1589-1616: 1602 年登位）の時代に，『ダライラマ四世伝』を著作を開始して，その没後にそれを完成させたことが知られているので，十六世紀後半に生まれ，十七世紀前半を中心に活躍した人物と推定される．より厳密な年代については，『カルナク仏教史』の著作年の年代考証とも不可離に関わっているので，それと併せて検討することにしたい.

カルナク翻訳師の著作については，『アク稀覯書目録』に四点の著作が記載されている．即ち，

- MHTL no. 10854: mKhar nag lo tsā ba'i dGa' ldan chos 'byung（カルナク翻訳師のガンデン仏教史）
- MHTL no. 10890: mKhar nag lo tsā ba'i rGyal ba bsod nams rgya mtsho'i rnam thar（カルナク翻訳師のギェルワ・ソナムギャンツォ伝[13]）
- MHTL no. 10891: Paṇ chen chos rgyan gyi rnam thar（パンチェン・チューキギェルツェン伝）

---

[12] 『カルナク仏教史』p. 94.17f.参照.

[13] この作品は，『トゥンカル稀覯書目録』p. 206 に記載されているが，フォリオ数等の書誌情報が明記されていないので，現存未確認のものとされている.

- MHTL no. 10892: rGyal ba yon tan rgya mtsho'i rnam thar（ギェルワ・ユンテンギャンツォ伝）

順に，『カルナク仏教史』，ダライラマ三世，パンチェンラマ一世，ダライラマ四世の伝記である．このうち，ダライラマ四世の伝記は，ダライラマ五世ガワンロプサンギャンツォによるダライラマ四世伝『宝環』（*Nor bu'i phreng ba*）（以下，『ダライラマ四世伝』）の奥書に，所依典籍の一つとして明記されており[14]，また，同伝には, 断片的に引用されていることが確認されている[15]. それは偈体の作品であり，その書名は以下の通りである．

[rGyal ba yon tan rgya mtsho'i] rnam thar tshigs bcad ma.

それ以外には，彼のツォンカパ伝が現存していることが知られている．

rJe btsun tsong kha pa chen po'i rnam par thar pa mKhar nag lo tsā bas mdzad pa bzhugs so.

この作品は，最近出版された『ツォンカパ伝集成』（全四巻）の第二巻に収録されている[16]．これは，奥書が付されておらず，本文にも，カルナク翻訳師の名前は見出されない．さらには，『アク稀覯書目録』にも記載されていないが，ギェルワン法主ロプサンティンレーナムギェル（rGyal dbang chos rje blo bzang 'phrin las rnam rgyal, 19 世紀）の『ツォンカパ伝』（1843-45 年造[17]）に，「カルナク翻訳師造『ジェ伝』（mKhar nag lo tsā bas mdzad pa'i rJe'i rnam thar）」という名で言及され，そこに引用された文章は，この伝記中に同定されるので，カルナク翻訳師の真作と見なしてよかろう[18]．またこのことから，この作品が，後代にも一定の影響力を持っていたことが分かるのである．

纏めるならば，カルナク翻訳師の著作としては，以上の五点の作品が確認されており，そのうち，『カルナク仏教史』と『ツォンカパ伝』の二点が出版済みの作品

---

[14] 『ダライラマ四世伝』p. 663.18f.: ... mKhar nag lo tsā ba dpal 'byor rgya mtshos mdzad pa'i *rNam thar tshigs bcad ma* rnams la gzhi byas/ ...

[15] 『カルナク仏教史』序文（mdzad pa po'i rnam thar）p. 1f.参照.

[16] *rJe btsun tsong kha pa chen po'i rnam thar phyogs bsgrigs*. 4 vols., Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2015, Vol. 2, pp. 41-53.

[17] 同書の奥書には，第十四ラプチュンの水卯年（chu yos, 1843）に著作を開始し，木巳年（shing 'brul, 1845）ホル月四月の上弦の七日（4/7）に完成したとある．ギェルワン法主造『ツォンカパ伝』p. 647f.参照.

[18] ギェルワン法主造『ツォンカパ伝』p. 39.5-11 に引かれた文章は，カルナク翻訳師造『ツォンカパ伝』p. 46.16-23 に同定される．それ以外にも，ギェルワン法主造『ツォンカパ伝』pp. 72.8-13; 641.10f.にもカルナク翻訳師造『ツォンカパ伝』に対する言及が見られる

として閲覧可能な状態にある．

チベット仏教史における『カルナク仏教史』の歴史的位置付けについて：

ある史書を研究する際には，その史書が，他の多数の史書の中でどのような歴史的位置付けにあるのか，史料としてどの程度の重要性があるのかという点を把握しておくことが肝要である．この点については，『カルナク仏教史』の後代への影響の一つとして，『黄瑠璃史』の三大典拠の一つとなっていることを先に指摘しておいた．ここでは，『カルナク仏教史』の文献学的背景について考察を加えておこう．その際，『黄瑠璃史』が依拠する他の二つの典拠である『カダム明灯史』と『新旧カダム史』，その中でも，特に『新旧カダム史』との関係に注目したい．実は，『新旧カダム史』は，『カルナク仏教史』の主要な資料的源泉となっていると推定されるからである．

『新旧カダム史』は，デンプ寺ロセルリン学堂（'Bras spungs blo gsal gling grwa tshang）の教科書作成者として知られているパンチェン・ソナムタクパにより，1529 年に著作されたゲルク派史である[19]．これは，ゲルク派の歴史を初めて包括的に解説した作品であり，パンチェン自身，ガンデン座主（dga' ldan khri pa）や，デプン寺，セラ寺（Se ra）等の大僧院の座主を歴任した人物であるので，その記述にはかなりの信憑性を置くことが出来る．単に古さだけをいうならば，例えば，ツォンカパの直弟子の一人であるグー翻訳師ションヌペル（'Gos lo tsā ba gzhon nu dpal, 1392-1481）は，彼の浩瀚な史書『青冊』（*Deb ther sngon po,* 1476-78 年造）の末尾の箇所に，「ゲデン派の章（dGe ldan pa'i skabs）」と云う一章を設けて，第七代ガンデン座主法主ロトゥテンパ（Chos rje blo gros brtan pa）までのゲルク派の略史を解説しており[20]，さらに，これに少し先立ち，ゲイェ・ツルティムセンゲ（dGe ye tshul khrims seng ge, 1428-1474-?）は，彼の『ゲイェ仏教史』（*dGe ye chos 'byung,* 1474 年造）において，同じく，第七代ガンデン座主までのゲルク派の略史を紹介していること[21]を指摘しなければならない．しかしながら，それらは，あくまで仏

---

[19] 『新旧カダム史』p. 206.19 参照.

[20] 『青冊』pp. 1249-1258 参照.

[21] 『ゲイェ仏教史』p. 62.15f.: da lo Byang rtse blo brtan pa (i.e. blo gros brtan pa) gdan sar phebs．ここで，「今年（da lo）」，ロトゥテンパがガンデン座主に就任したと明記されているが，『新旧カダム史』によれば，これは，水巳年（chu sbrul），即ち，1473 年のことである（同書 p. 87.3）.

教史全体の中の一部として言及されているだけであり，単独のゲルク派史としては，この『新旧カダム史』が最古のものであるといってよかろう．その意味で，その資料的価値はきわめて大きいものと評価される．

この著作は，冒頭の部分でカダム派の略史を紹介した後で，ツォンカパに始まるゲルク派の歴史を詳しく解説しているが，これは，書名にあるように，ゲルク派を「新カダム派（bKa' gdams gsar ma pa）」と称し，その学統をカダム派から直接に受け継ぐものであることを宣説したものである．この「新カダム派」という表現は，恐らくは，諸々のカダム派史の中でも最重要と評価されるべき『カダム明灯史』の著者レチェン・クンガギェルツェンにより創出された表現と推定されるが[22]，この人物は，実はパンチェン・ソナムタクパの主要な師の一人であり[23]，パンチェン自身，『新旧カダム史』において，次のような興味深い記述を残している．

> 「それに対して，嘗て，カダム［派］の上師の仏教史を著作した者は何人か現れたが，［そのうち］最上のものとして，私の上師（bdag gi bla ma）である Ānandadhvaja（A nanta dhwa tstshā, sic, i.e. [Las chen] kun dga' rgyal mtshan）御前は『カダム明灯史』（*bKa' gdams rin po che gsal ba'i sgron me*, lit. カダムの宝を明らかにする灯明）と云う大史書を著作なさっているので，ここでは，［カダム派の歴史については］ごく簡略にしか記さないが，大徳ツォンカパ・チェンポの口承（bka' brgyud）から始まる詳細な仏教史（＝ゲルク派史）はこれまで存在しないので，・・・」（『新旧カダム史』p. 204.12-17）

『カダム明灯史』（1494 年造）は，カダム派の歴史を解説した大著であるが，その末尾の箇所に，ゲルク派の略史を掲載している．それに対して，この『新旧カダム史』では，冒頭のカダム派史の委細は，『カダム明灯史』に譲り，ゲルク派史の部分を主としているわけである．『新旧カダム史』が，最古の包括的なゲルク派史であることは，このパンチェン自身の言葉から確認することが出来る．

『ゲイェ仏教史』の奥書によれば，『ゲイェ仏教史』の著作は，「木午年（shing rta, 1474）」であるので（同書 p. 69.5），丁度その一年前のことである．このことは，作中の著作時現在が，必ずしも，奥書に記された著作年を指すとは限らない一例である．ロトゥテンパの略伝は，『カルナク仏教史』p. 23f.;『黄瑠璃史』p. 77f.参照．

[22] 『カダム明灯史』には，ゲルク派史の章名を提示した箇所で，この「新カダム派（bKa' gdams gsar ma ba）」という表現を提示している（同書 p. 823.23）．これは筆者の知る限り，この用語が用いられた最初の文献である．

[23] パンチェンは，レチェン・クンガギェルツェンからこの『カダム明灯史』を初め多数の典籍を聴聞したことを明記している．『新旧カダム史』pp. 167.19-168.1 参照．

この『新旧カダム史』の主要部分であるゲルク派史の基本構成は，まず最初に，ゲルク派の創始者であるツォンカパの伝記を紹介し，その後で，ツォンカパの弟子筋の事績の紹介に移っている．特に，第二代ガンデン座主を務めたタルマリンチェン（Dar ma rin chen, 1364-1432）や第三代ガンデン座主ケードゥプジェ（mKhas grub dge legs dpal bzang, 1385-1438）等の歴代ガンデン座主の略伝を始め，ガンデン寺，ギュメ（rGyud smad）・ギュトゥ（rGyud stod）という二つの密教学堂，デプン寺，セラ寺，タシルンポ寺（bKra shis lhun po）といった大僧院の寺統が続き，さらには，サンプ寺内のゲルク派系学堂であるラトゥ学堂等の寺統も併せて紹介されている．最後には，分量的には決して多くはないが，それ以外のウーツァン，カム，アムド，ガリ地方などの各地で活躍したゲルク派の高僧や彼らが建立した寺院などの記述が付論のような形で付されているものである．

これに対して，『カルナク仏教史』では，まず『新旧カダム史』の冒頭に付されていたカダム派の略史が完全に省略されており，純粋なゲルク派史となっている点で『新旧カダム史』とは異なっている．さらに，ゲルク派史の部分の基本構成は，『新旧カダム史』のそれをほぼ踏襲しつつも，『新旧カダム史』ではごく簡略かつ部分的にしか触れられていなかった地方の諸寺院の寺統の部分を著しく増広して，さらに，地域別に整理して解説している点に特徴が見られる．他にも，『新旧カダム史』では，主となるのは，あくまで一連のゲルク派の高僧達の事績の紹介であり，寺院やその寺統の紹介はその付論に過ぎなかったが，『カルナク仏教史』では，その主従関係が逆転しており，個々の高僧の事績よりも，寺院や寺統の紹介を主としているので，高僧の略伝の部分は，『新旧カダム史』に比較すると著しく縮小している．

この『カルナク仏教史』の構成や著述の進め方は，基本的に，『黄瑠璃史』にも，ほぼ忠実に踏襲されることになる．但し，『黄瑠璃史』では，地方の末寺の寺統を紹介した後で，多くの章を追加して多岐にわたる主題を解説しているので，その点で『カルナク仏教史』と異なる．その具体的な内容の紹介は，本稿の主題を大きく超えるので，別稿において論ずることにして，ここでは，構成面からこれらの一連の史書の歴史的展開を提示するに留めておきたい．以上，ここで紹介した『カダム明灯史』等の一連の史書の基本構成を，比較しやすいように一覧の形で示すならば，以下の通りである．

図．『カダム明灯史』『新旧カダム史』『カルナク仏教史』『黄瑠璃史』の基本構成一覧

<table>
<tr><th></th><th>『カダム明灯史』</th><th>『新旧カダム史』</th><th>『カルナク仏教史』</th><th>『黄瑠璃史』</th></tr>
<tr><td rowspan="4">主題</td><td rowspan="3">カダム派史</td><td>旧カダム派史（略史）</td><td rowspan="3">ゲルク派史
• ツォンカパ伝
• ガンデン座主の系譜
• 三大寺及び二密教学堂
• サンガクカル寺
• ラトゥ学堂等のサンプ寺のゲルク派系学堂</td><td rowspan="3">ゲルク派史
• ツォンカパ伝
• ガンデン座主の系譜
• 三大寺及び二密教学堂
• ラサ近郊の寺院（サンガクカル寺やラトゥ学堂等を含む．）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">新カダム派史（ゲルク派史）
• ツォンカパ伝
• ガンデン座主の系譜
• 三大寺及び二密教学堂
• タシルンポ寺
• ラトゥ学堂等のサンプ寺のゲルク系学堂</td></tr>
<tr><td rowspan="2">• それ以外のチベット全土の末寺（地域別に分類．タシルンポ寺はツァンの箇所に記載）</td></tr>
<tr><td>新カダム派史（ゲルク派史）</td><td>• 地方の高僧の略伝（末寺への言及を含む）</td><td>• 付論（多様な主題を含む）</td></tr>
</table>

点印を付けて列挙した箇所は，その章の細目を示す．内容を細かく見るならば，例えば，『カルナク仏教史』では，三大寺及び二密教学堂の後で，特に，サンガクカル寺の寺統についてかなりの紙面を費やしているが，これは『新旧カダム史』には見られないことや，タシルンポ寺がツァン地方の寺院を紹介する箇所に振り分けられていること等色々と言及すべきことはあるが，その詳細は別稿にて論ずる予定なので，ここでは触れないでおく．

カルナク翻訳師は，『カルナク仏教史』所収の歴代ガンデン座主の系譜を挙げた所で，第十五代ガンデン座主パンチェン・ソナムタクパの略伝を紹介している[24]．そこには，この『新旧カダム史』に対する言及も見られるが，その後で，この『新旧カダム史』を誹謗する「或る者（kha cig）」の見解が引かれ，それに対して，以下のような注目に値する記述を残している．

「この仏教史（＝『新旧カダム史』）のお陰で，ツォンカパの教法が興隆し

[24] 『カルナク仏教史』pp. 29-32 参照．

た歴史が分かるのであり，我々（＝カルナク翻訳師等）の誰かに質問したところで，［『新旧カダム史』に紹介されている］寺院の半分ほどの歴史すらもどうして語り得ることがあろうか.」（『カルナク仏教史』pp. 30.19-31.3）

この言明には，『新旧カダム史』に対するカルナク翻訳師の高い評価が如実に現れている．『新旧カダム史』と『カルナク仏教史』に引かれた多くの系譜の比較対照作業は別稿を期するが，実のところ，『カルナク仏教史』に引かれた系譜は，『新旧カダム史』に引かれた系譜を前提としつつ，それに『新旧カダム史』著作時以降の系譜を接ぎ穂したものであることはここで指摘しておきたい．但し，両著作に引かれた系譜には出入りが見られることも確かなので，その点をどう解釈するのかが検討課題となっている．

このように，『カダム明灯史』→『新旧カダム史』→『カルナク仏教史』という史書の系統を確認することが出来たが，『カルナク仏教史』と『黄瑠璃史』の関係は，これにも増して密なものがある．なぜならば，単に，ガンデン座主の系譜や，三大寺，二つの密教学堂，タシルンポ寺，ラトゥ学堂等のサンプ寺内のゲルク派系の四学堂の寺統のみならず，ウーツァン，カム，アムド，ガリ等のチベット全土に点在する膨大な数のゲルク派の末寺の寺統に至るまで，両著作の間には，相当に緊密な関係が確認されるからである．具体的には，『黄瑠璃史』は，明らかに，地方の多数のゲルク派の寺院の寺統を解説するに際して，『カルナク仏教史』を前提として，そこに挙げられた寺院のほぼ全てを取り上げた上で，『カルナク仏教史』に収録されていない寺院の寺統を補足している．さらには，『カルナク仏教史』著作時以降の座主の系譜を補足したり，あるいは，『カルナク仏教史』では，単に建立者名のみが示されていたり，あるいは，単なる寺名が列挙されているものであっても，その座主の系譜を丁寧に収集していることが，特徴的である．さらに，『カルナク仏教史』やカルナク翻訳師の名前を明示した上で，その見解を修正したり，あるいは，自説を補強する典拠として挙げていたりしていることもまた確認されている[25]．その具体的内容の紹介は，紙面の余裕がないので，稿を改めて行うことにするとして，ここでは，以下の史書の系統が確認できたことでよしとしておく．

『カダム明灯史』→『新旧カダム史』→『カルナク仏教史』→『黄瑠璃史』

[25] 具体的な箇所を列挙しておくならば，『黄瑠璃史』pp. 152.5; 152.16; 152.21; 159.23; 201.13; 276.8; 307.19; 323.4; 324.12; 328.8; 331.4; 332.10; 334.7; 335.4.

以上，『カルナク仏教史』のチベット仏教史における位置付けを確認した．そこで明らかになったことは，一連の史書の中でも，特に『新旧カダム史』を前提としていることと，『黄瑠璃史』の主要な資料的源泉となったことである．デスィ・サンギェギャンツォが『カダム明灯史』等の先行する三つの史書を特に主要な典拠として挙げたのも，故なき事ではないのである．

そこで，以上のことを念頭に置きつつ，次に，この『黄瑠璃史』を補助資料として，『カルナク仏教史』の複雑な成立事情を解明することに分析を移すことにしたい．

『カルナク仏教史』の成立事情について ― その著作年と複層性 ―：

まず，『カルナク仏教史』の著作年については，その奥書には何も明記されていないので，そこから正確な年代情報を得ることは出来ない．参考までに，奥書を訳出しておこう．

> 「以上のように，第二の勝者，法王大徳ツォンカパ・チェンポの教宝が一切の方角へ遍満した仕方は，十力の境位（＝仏位）を獲得した者達の行境であるほか，私等が些かなりとも語ることは出来ないが，このチベットの地，有雪国において，教宝が流布した仕方を些か立てた本書は，学処と，講義・問答・著作の仕方をほんの部分的に理解し，大徳ツォンカパ・チェンポの教宝に随順して，善説の甘露により陶冶された，貴族（rje rigs）出身であるカルナク翻訳師ペルジョルギャンツォにより著作された．」（『カルナク仏教史』p. 230）

この奥書には，著者名が明記されているほかは，書名も著作年や著作地も，著作請願者や師事した師の名前も記されておらず，残念ながら書誌情報は極めて乏しいと言わざるを得ない．せいぜいカルナク翻訳師が貴族出身であることが判明した程度である．本書の著作年については，Martin 1997 では，ca. 1600 年という年代を提示しているが，年代考証は特になされていない．他方，『カルナク仏教史』活字本校訂者は，極めて重要な年代考証を行なっているので，それをまず最初に紹介しておこう．同校訂者は，以下の二つの点を指摘している[26]．

---

[26] 『カルナク仏教史』序文（mdzad pa po'i rnam thar）p. 2 参照．

1.『ダライラマ四世伝』に引かれたカルナク翻訳師の偈文の伝記（*rNam thar tshigs bcad ma*）には，その伝記著作時はダライラマ四世の時代であり，かつ，火辰年（me 'brug, 1616）にダライラマ四世が逝去したことが言及されている[27].

2.『カルナク仏教史』所収のダライラマ五世伝は，ダライラマ五世が十四歳の時（1630 年）の記述までで終わっている.

このことから，カルナク翻訳師は，ダライラマ四世の存命中に,『ダライラマ四世伝』の著作を開始して，ダライラマ四世が亡くなった 1616 年以後にそれを完成したこと，さらには,『カルナク仏教史』は，ダライラマ五世が十四歳の年である 1630 年頃に著作されたものであることなどを考証している．この年代考証は，極めて堅実なものと評価できるが，一点補足するならば,『ダライラマ四世伝』に「現在」がダライラマ四世の時代と明記されている以上，その著作開始年のみならず，著作完成年もまたダライラマ五世が登位する前とすべきである. ダライラマ五世の化身認定は, 五世が御年六歳の 1622 年であるので[28], 1616 年から 1622 年の間, 1616 年か少なくてもその数年以内に著作されたことは疑いない.

他方,『カルナク仏教史』の著作年については，些か事情が複雑である．結論を先取りして述べておくならば，本書が 1630 年頃に著述されたことは，他の諸々の情報からも確認されるが，他方において，明らかにそれ以降の情報もを含んでいる箇所も確認されており, その点を如何に解釈すべきかが検討課題となっている.『黄瑠璃史』は,『カルナク仏教史』所収の系譜を前提としつつ，それに，それ以降の系譜を接ぎ穂する形で，自身の系譜を提示しているので，その両者を比較対照することを通じて,『カルナク仏教史』所収の諸々の系譜の著作年の概算を推定することが可能となっている．その点に留意して，以下，幾つか例を挙げて,『カルナク

---

[27] 参考までに，カルナク翻訳師による四世伝の当該箇所を，ダライラマ五世による『ダライラマ四世伝』の引用箇所から引いておく．『ダライラマ四世伝』p. 583.4f.: de yang Paṇ chen dGe 'dun grub// slar yang Saṃ gha samu dra (i.e. dGe 'dun rgya mtsho)// rJe btsun bSod nams rgya mtsho'i zhab// da lta bDe chen chos rgyal lags//. ここでは，順に，初代ダライラマであるゲンドゥンドゥプから歴代ダライラマの名前が列挙されているが，「現在（da lta）」のダライラマとして挙げられた bDe chen chos rgyal とはダライラマ四世ユンテンギャンツォに他ならない．『カルナク仏教史』p. 73.15f.参照．さらに，その没年の「火辰年」に言及した記述としては，『ダライラマ四世伝』p. 661.7-9: dgung lo rgyu skar grangs ldan skabs// me 'brug rgyal zla'i tshes dbang dus// dgongs pa chos kyi dbyings su thim//

[28] 『雪域辞典』p. 387 参照.

仏教史』の著作年を検討しておきたい.

(1) 1630 年頃に著作された資料：

まず『カルナク仏教史』所収のダライラマ五世伝同様に，1630 年頃に記載されたと推定される資料を幾つか紹介しておこう．その一例として，まず最初にサンプ寺（gSang phu ne'u thog）の寺統が挙げられる．サンプ寺は，上院（Gling stod）と下院（Gling smad）の二院に分けられるが，そのうちの下院法主の系譜[29]は，先に紹介したカルナク翻訳師の師に当たるチャムパリンパ・法主クンチョクチューペル（Byams pa gling pa chos kyi rje dkon mchog chos 'phel, 1573-1646[30]）で終わっている．この人物は，この系譜が著作された当時の下院法主に相当すると思われるが，ガンデン座主をも務めた人物でもあり，かのパンチェン・ロプサンチューキギェルツェン（Paṇ chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan, 1570-1662）と共に，ダライラマ五世の化身認定を行ったことでも知られている[31]．幸い，彼の伝記資料は比較的豊富であり，『カルナク仏教史』や『黄瑠璃史』に略伝が収録されているほか[32]，ダライラマ五世による伝記（以下，『クンチョクチューペル伝』）が利用可能である．そこから生没年の他にも，諸々の重要な年代情報を回収することができる．このクンチョクチューペルは，非常に多くの寺院の座主を歴任した人物であり，『カルナク仏教史』所収の諸寺院の座主系譜の年代考証する際に，基軸となる重要な人物なので，彼の職歴を最初に一覧の形で整理しておこう．『クンチョクチューペル伝』によれば，以下の通りである．

図．下院法主クンチョクチューペルの職歴

年齢（年代）	職歴［『クンチョクチューペル伝』の頁数］
30 歳の水寅年（1602）	ラトゥ（Rwa stod）学堂長就任［400］

29 『カルナク仏教史』pp. 102.15-103.12 参照.
30 『チベット史年代便覧』p. 88 によれば，クンチョクチューペルの没年を 1644 年に立てる資料も見られるが，後述するように，1644 年にダライラマ五世により記された『クンチョクチューペル伝』には，その逝去に対する言及は見られないので，誤伝と見なすべきである.
31 『雪域辞典』p. 387 参照.
32 『カルナク仏教史』p. 49;『黄瑠璃史』p. 90f.参照.

31 歳の水卯年（1603）	ラトゥ学堂とラメ（Rwa smad）学堂の共通のトゥンチェン（drung chen[33]）に就任［401］
40 歳の水子年（1612）	ギュトゥ（rGyud stod）学堂長に就任［403］
43 歳の木卯年（1615）	リンチェンリン寺（Chos sde rin chen gling）座主に就任［405］
46 歳の土午年（1618）	キョルモルン寺（sKyor mo lung）座主に就任［405］
47 歳の土未年（1619）	ゴク翻訳師の法座（＝サンプ寺下院法主）に就任[34]［405-406］
48 歳の鉄申年（1620）	ジンチ寺（rDzing phyi）座主に就任［406］
49 歳の鉄酉年（1621）	サンガクカル寺（gSang sngags mkhar）座主に就任［406］
51 歳の水亥年（1623）	ロセルリン（Blo gsal gling）学堂長に就任［407］
53 歳の木丑年（1625）	シャルツェ（Shar rtse）学堂長に就任［407］
54 歳の火寅年（1626）	ガンデン座主に就任［407］*十二年間（1626-1637）在位［『黄瑠璃史』90.18f.[35]］

この『クンチョクチューペル伝』は，奥書によれば，ダライラマ五世が二十八歳の木申年（1644）に著作されたものである[36]．これは丁度クンチョクチューペルが亡くなる二年前のことである．ダライラマ五世は，伝記中で自ら述べているように，1627 年頃から六年間，デプン寺でこのクンチョクチューペルに師事しており[37]，師の事績を熟知していたことは疑いない．それ故，一覧に示した年代情報はほぼ史実と認めてよかろう．

クンチョクチューペルが下院法主に就任したのは，1619 年であり，1626 年にガンデン座主に就任して，十二年間（1626-1637）在位した．『クンチョクチューペル伝』には，各座主の在任期間や退任年は明記されていないので，ガンデン座主の在

[33] drung chen とは，『蔵漢大辞典』によれば，drung yig chen po の省略形である（同書 p. 1333）．drung yig とは，書記や秘書の意味であるが，ここでは文脈から判断して，ラトゥないしラメ学堂長を務めた後で就任すべき両学堂共通の座主の名称と推定される．

[34] 『クンチョクチューペル伝』p. 405.21f.: ... rNgog lo tsā ba blo ldan shes rab kyi chos kyi gdan khri la phebs nas/... ここで，「ゴク翻訳師ロデンシェーラプの法座」とは，サンプ寺座主，特に，ここでは下院法主を指す．

[35] dgung lo nga bzhi pa me stag (1626) la dGa' ldan khri thog tu phebs nas khri la lo bcu gnyis bskyangs shing de nas zur du bzhugs/. 『チベット歴史便覧』p. 183 では，在任期間を七年として，1626-1632 年という就任期間を挙げているが，典拠不明であり，その妥当性は疑わしい．『チベット史年代便覧』p. 88 では，1626-1637 年としている．

[36] 『クンチョクチューペル伝』p. 413.10 参照．

[37] 『クンチョクチューペル伝』p. 408.18ff.参照．

任期間を除き，その点が定かでないが，仮に，ガンデン座主就任時まで下院法主を務めていたのであれば，1626 年までその任にあったことなる．但し，ガンデン寺座主と下院法主を兼任していた可能性も否定できない．いずれにせよ，この『カルナク仏教史』所収のサンプ寺下院法主の系譜が，1630 年頃かそれより少し前の情報を反映したものであることは疑いないところである．ちなみに，1698 年に著作された『黄瑠璃史』所収の下院法主の系譜は，mNyes thang pa dpal ldan grags pa という人物で終わっているが，クンチョクチューペルは，それから八代前の座主に相当する[38].

さらに，このサンプ寺の一学堂であるラトゥ学堂（Ra/Rwa stod grwa tshang）の座主の系譜にも，このクンチョクチューペルの名前は，系譜末の Khe gsum chos mdzad blo bzang bstan 'dzin から一代前に見いだされる[39]．下院法主就任への道として，まずはサンプ寺所属の一学堂の座主を務める必要があったと推定されるが，そのことは，ここからも確認できるのである．ちなみに，この Khe gsum chos mdzad は，『黄瑠璃史』所収のラトゥ学堂の系譜では，著作時の座主である gSang sngags mkhar ba tshul khrims rin chen から数えて十二代前の座主に当たる[40].

デプン寺ロセルリン学堂（'Bras spungs blo gsal gling grwa tshang）の座主の系譜もまた同様に，Khe gsum chos mdzad で終わっており，クンチョクチューペルはその直前に位置付けられている[41]．Khe gsum chos mdzad は，『黄瑠璃史』著作時の座主 Mi nyag bla zur lha ma mgon から数えて，十一代前の座主に当たっている[42]．ちなみに，ダライラマ五世によれば，『クンチョクチューペル伝』著作時現在（1644 年）のロセルリン学堂長は, Phod khang pa 'jam dbyangs bkra shis であるが[43], 彼は，『黄瑠璃史』所収のロセルリン学堂長の系譜では，Khe gsum chos mdzad の直後に位置づけられている[44].

キョルモルン寺（sKyor mo lung）の座主の系譜でも，クンチョクチューペルは，

---

38 『黄瑠璃史』p. 150.21f.参照.
39 『カルナク仏教史』p. 96.12f.参照.
40 『黄瑠璃史』p. 147.10f.参照.
41 『カルナク仏教史』p. 79.17f.参照.
42 『黄瑠璃史』p. 134.14f.参照.
43 『クンチョクチューペル伝』p. 407.9 参照.
44 『黄瑠璃史』p. 134.15 参照.

系譜末の sPrul pa'i sku grags pa rgyal mtshan の直前に置かれているが[45]，彼がキョルモルン寺の座主に就任したのは，1618 年なので，その一代後までの年代情報が記載されていることになる．sPrul pa'i sku grags pa rgyal mtshan は，『黄瑠璃史』著作時の座主 Klu 'bum blo bzang 'jam dbyangs から数えて，九代前の座主である[46].

他方，サンガクカル寺（gSang sngags mkhar）の座主の系譜では，クンチョクチューペルはその著作当時の座主に位置付けられており[47],『黄瑠璃史』著作時の座主 Co ne tshul khrims dar rgyas（1632-1685-?[48]）から数えて，五代前に当たる[49]．クンチョクチューペルの一前代の座主は，sTag lung brag pa blo gros rgya mtsho（1546-1618）であるが，彼は第 30 代ガンデン座主を務めたことが知られている[50]．彼が亡くなった 1618 年は，所謂，「セラ・デプン寺騒乱（Se/Ser 'bras gling log）」が起った激動の年であるが[51]，彼はラトゥ学堂長の系譜においても，クンチョクチューペルの直前にその名前を見出す事ができる．これは，当時，ラトゥ学堂長はサンガクカル寺の座主を務める慣習があったことによる[52].『カルナク仏教史』では，カルナク翻訳師がクンチョクチューペルに師事した記述は，サンガクカル寺の寺統史の中であり，クンチョクチューペルが 1626 年にガンデン座主に就任した記述の後に見出されるので，彼がクンチョクチューペルに師事したのは，恐らくは，1626 年以降，同じサンガクカル寺においてのことであろう．但し，クンチョクチューペルの逝去（1646 年）への言及は見られないので，サンガクカル寺の系譜は 1626-1646 年の間に著作されたものと推定される．以上の各寺院の座主の系譜を整理して挙げるならば，以下の通りである[53].

---

45 『カルナク仏教史』p. 132 参照.

46 『黄瑠璃史』p. 157.13 参照．そこでは，Gad kha sa pa grags rgyan と表記されている．grasg rgyan は，grags pa rgyal mtshan の省略形であるので，同一人物である.

47 『カルナク仏教史』p. 94.12f.参照.

48 Co ne tshul khrims dar rgyas は，第 45 代ガンデン座主であり，1685 年にガンデン座主に登位したことが知られている．没年は不明である．彼の年代と経歴についてはその典拠と共に後述する.

49 『黄瑠璃史』p. 146.5-8 参照.

50 彼の略伝は，『カルナク仏教史』や『黄瑠璃史』所収のガンデン座主の系譜に含まれている．『カルナク仏教史』p. 46f.; 『黄瑠璃史』p. 88 参照．年代情報もそれに依る.

51 このセラ・デプン寺騒乱については，『チベット政治史』p. 397（和訳 p. 126）を参照.

52 『カルナク仏教史』p. 95.4f.: Ra ba stod kyi slob dpon du ma zhig gSang sngags mkhar gdan sar phebs pa yang mang//

53 『カルナク仏教史』及び『黄瑠璃史』所収の各寺院座主系譜の頁数は以下の通りである.

ラトゥ学堂長	キョルモルン寺座主	サンプ寺下院法主	サンガクカル寺座主	ロセルリン学堂長
中略	中略	中略	中略	中略
sTag lung brag pa blo gros rgya mtsho[54]	sTag lung brag pa blo gros rgya mtsho	'Phrin las dpal 'byor	'Bri tshang rab 'byams pa sangs rgyas rgyal mtshan	sTod lung pa don grub mgon po
dKon mchog chos 'phel [1602-?]	dKon mchog chos 'phel [1618-?]	'Phags pa nor bu	sTag lung brag pa blo gros rgya mtsho	dKon mchog chos 'phel [1623-?]
Khe gsum chos mdzad blo bzang bstan 'dzin	sPrul pa'i sku grags pa rgyal mtshan	dKon mchog chos 'phel [1619-?]	dKon mchog chos 'phel [1621-?]	Khe gsum chos mdzad
sPyan g-yas byang gling rab 'byams pa	bSam grub sgang pa blo bzang ngag dbang	gNyes thang pa kun dga' sangs rgyas	sPyan g-yas byang gling rab 'byams pa	Phod khang pa 'jam dbyangs bkra shis [?-1644-?]
中略	中略	中略	中略	中略

注意：座主名の後に括弧内に示した年代は在任期間を表す.

網掛けした部分は，クンチョクチューペルが座主を務めた箇所を示しており，二重線より前半部分は『カルナク仏教史』に収録されている系譜，後半部は『黄瑠璃史』から補足したものである．前述したように，ロセルリン学堂長の系譜中の Phod khang pa 'jam dbyangs bkra shis は，1644 年にはロセルリン学堂長を務めていたことが判明しており，『カルナク仏教史』所収の上述の一連の系譜は，同書所収のダライラマ五世伝同様に，1630 年前後に記されたことを示唆している．それ故，1630 年前後には，既にラトゥ学堂長やキョルモルン寺座主，ロセルリン学堂長を退任して，下院法主とサンガクカル寺座主をガンデン座主とともに兼任していたことが以

- ラトゥ学堂：『カルナク仏教史』［96］；『黄瑠璃史』［147］
- キョルモルン寺：『カルナク仏教史』［132f.］；『黄瑠璃史』［157］
- サンプ寺下院法主：『カルナク仏教史』［102f.］；『黄瑠璃史』［150f.］
- サンガクカル寺：『カルナク仏教史』［91-95］；『黄瑠璃史』［144-146］
- ロセルリン学堂：『カルナク仏教史』［79］；『黄瑠璃史』［134］

[54] この sTag lung brag pa blo gros rgya mtsho（1546-1618）は，第 30 代ガンデン座主を務めた人物である．その略伝は，『カルナク仏教史』p. 46f.;『黄瑠璃史』p. 88 に収録されており，生没年やガンデン座主就任年（1615）は，そこに明記されている．

上の系譜から読み取れるのである．また，ラトゥ学堂とキョルモルン寺，サンガクカル寺の座主は殆どが共通しているので，これらの寺院は，当時密接な関係にあったことが判明したが，これは，系譜研究を通じて，当時の諸寺院の学統や交流関係を明らかにすることができる一例である．

（2）1630 年以降に著作された資料：

以上，確かに『カルナク仏教史』には，所収のダライラマ五世伝が著作された 1630 年頃とほぼ同時期に記されたと推定される諸々の系譜が確認されるのであるが，他方においては，明らかに 1630 年以降に記された系譜も確認されるので，我々の困惑を招くのである．例えば，ガンデン座主（dGa' ldan khri pa）の系譜であるが，『カルナク仏教史』では，第 42 代ガンデン座主 Blo bzang don yod までの系譜を含んでいる[55]．下院法主クンチョクチューペルは，第 35 代ガンデン座主としてその名を見出すことが出来るが[56]，これは，第 42 ガンデン座主から数えて，実に七代も前に当たるのである．前述した通り，下院法主クンチョクチューペルがガンデン座主に就任したのは，1626 年であり，十二年間座主を務めたとあるので，その在任期間は，1626-1637 年となる．もしこの『カルナク仏教史』が 1630 年頃に著作されたものであれば，当然，その著作時のガンデン座主は，下院法主クンチョクチューペルであって然るべきであるが，実際には，その七代後の座主の系譜まで収録しているのである．本書に収録されている第 42 代ガンデン座主 Blo bzang don yod の略伝は，丁度，彼がガンデン寺座主に就任した記述で終わっているので，その頃に，このガンデン座主の系譜が著作されたことになる．

Blo bzang don yod のガンデン座主在任期間は，『カルナク仏教史』や『黄瑠璃史』には明記されていないが，1668-1674/5 年の七年間ないし八年間とされる[57]．それ故，『カルナク仏教史』所収のガンデン座主の系譜は，1668 年頃に著作されたことになる．今は便宜上，その著作年を ca. 1670 年としておこう．この場合，先ほどの想定著作年である ca. 1630 年と四十年程もズレがあるので，この点を如何に解釈するべきかが問題となっている．

---

55 『カルナク仏教史』p. 52 参照.
56 『カルナク仏教史』p. 49 参照.
57 『チベット史年代便覧』p. 89; 『チベット歴史便覧』p. 183 参照.

実は，1630 年以降の情報を含むものは，このガンデン座主の系譜のみに限らない．他にも，幾つかの系譜が散見している．紙面の関係上その全てを紹介するわけにはいかないが，その中から幾つか例を挙げておこう．

例えば，先にも言及したオルガのジンチ寺（rDzing phyi）であるが，『カルナク仏教史』は，Tshul khrims dar rgyas までの系譜を掲載している[58]．この人物は，実は，『黄瑠璃史』所収の系譜では，『黄瑠璃史』著作時の座主を務めた人物として記されている Co ne tshul khrims dar rgyas（1632-1685-?）に他ならず[59]，先にも指摘したように，第 45 代ガンデン座主を務めた人物である．Co ne tshul khrims dar rgyas の略伝は，『黄瑠璃史』に掲載されているが[60]，それによれば，水申年（1632）に生誕，三十歳の年（1651）にセラメ（Se ra smad）学堂長に就任．十四年間（1651-1664）在任した．その後，ジンチ寺の座主に就任．他にも，オルガ・サムリン寺（'Ol dga' bsam gling），レプリ寺（Sleb ri），サンガクカル寺等の多くの寺院の座主を務めた[61]．火辰年（1676）に，モンゴル王フビライ（Se chen rgyal po）に会う．四十七歳の土午年（1678），ダライラマ五世をケンポとして，具足戒を受戒．その後，ガンデン寺シャルツェ（Shar rtse）学堂長を務めてから，五十四歳の木丑年（1685）にガンデン座主就任．その退任後に，このジンチ寺において，ケンスル（mkhan zur，元座主）として住持したとある．

この Co ne tshul khrims dar rgyas がジンチ寺の座主に就任した正確な年代は不明だが，『黄瑠璃史』では，セラメ学堂長を退任した 1664 年とフビライと会見した 1676 年の間に位置付けられている．今は暫定的に，その中間を取り，1670 年前後としておこう．ここから，『カルナク仏教史』及び『黄瑠璃史』は，等しく，1670 年前後のジンチ寺座主の情報を記していることが判明する．この人物は，1685 年に第 45 代ガンデン座主に就任するが，前述したように，『カルナク仏教史』では，第 42 代ガンデン座主 Blo bzang don yod までの系譜までしか挙げていないので，『カ

---

[58] 『カルナク仏教史』p. 153.14f.参照．そこでは，dByer med ko ba mkhan chen byams pa rig 'dzin[/] Tshul khrims dar rgyas と記されているが，これは，『黄瑠璃史』の系譜に，E ri sgo byams pa rig 'dzin/ da lta Khri rin po che Co ne tshul khrims dar gyas kyi skabs so//［『黄瑠璃史』p. 192.12f.］とあるのに対応しているので，二人の人物の名前を含むと解釈すべきである．

[59] 『黄瑠璃史』p. 192.12 参照．

[60] 『黄瑠璃史』pp. 93-95 参照．そこでは，Co ne 'jam dbyangs tshul khrims dar rgyas と表記されているが，同一人物である．

[61] これ以外にも，ツェル・クンタン寺の座主をも務めたとするが，同書所収のツェル・クンタン寺の寺統には，この人物の名前は見出されないので，外しておく．『黄瑠璃史』pp. 151-153 参照．

ルナク仏教史』著作当時には，Co ne tshul khrims dar rgyas は，ジンチ寺の座主であったが，まだガンデン座主に登位する前のことであったことが分かる．前述したように，Blo bzang don yod のガンデン座主就任期間から判断して，1670 年前後までの記述が『カルナク仏教史』の最新の層と判断したが，そのことは，このジンチ寺の座主の系譜からも確認できるのである．

同様の事例は，レプリ寺座主の系譜にも見出すことが出来る．即ち，この Co ne tshul khrims dar rgyas は，『カルナク仏教史』と『黄瑠璃史』共に，系譜末に著作時現在の座主として位置付けられているのである[62]．これもまた，1670 年頃の情報を反映していると見てよかろう．

興味深いのは，オルガ・サムリン寺とサンガクカル寺の座主の系譜を見ると，『黄瑠璃史』では，何れも，Co ne tshul khrims dar rgyas は，著作時現在の座主として記載されているが，『カルナク仏教史』では，その数代前の座主の名前までしか挙げていない点である[63]．即ち，オルガ・サムリン寺の系譜では，四代前の Rab 'byams pa bstan pa rgya mtsho まで，サンガクカル寺の系譜では，前述したように，五代前の下院法主クンチョクチューペルまでである．このことから，サンガクカル寺のみならず，オルガ・サムリン寺の座主の系譜もまた，『カルナク仏教史』では，1630 年頃までの情報しか含んでいないことが判明する．ちなみに，『黄瑠璃史』によれば，Co ne tshul khrims dar rgyas は，サンガクカル寺の座主とガンデン寺座主を兼任していたとされるので[64]，ガンデン座主に就任した 1685 年以降もサンガクカル寺座主を務めていたことが分かる．

ジンチ寺とレプリ寺は，『カルナク仏教史』所収の或る一部の系譜が，『黄瑠璃史』著作時の座主までの系譜を含んでいる一例であるが，同様の例は，ガリ学堂（mNga' ris grwa tshang）の寺統にも確認することが出来る．即ち，『カルナク仏教史』は，Blo bzang bstan 'phel までの系譜を含んでいるが，この人物は，『黄瑠璃史』では，その著作時の座主として記載されている[65]．

以上は，『カルナク仏教史』の一番新しい層が『黄瑠璃史』所収の系譜の著作時

---

[62] 『カルナク仏教史』p. 158.11f.;『黄瑠璃史』p. 196.4 参照.
[63] 『カルナク仏教史』pp. 94, 154;『黄瑠璃史』pp. 146, 192 参照.
[64] 『黄瑠璃史』p. 146.13f.: da lta Co ne tshul khrims dar rgyas sogs dGa' ldan gyi khri dang zung 'brel gyi zhal 'dzin phal che bas gnang bzhin pa'o//
[65] 『カルナク仏教史』p. 164.1;『黄瑠璃史』p. 199.3 参照.

と同時期に記されたことを示す例である．但し，このことは，必ずしも，それが『黄瑠璃史』著作時とされる 1698 年[66]に記されたものであることを保証するものではない．『黄瑠璃史』の収録されている膨大な寺統の著作時にタイムラグがある可能性は大いにあり得るからであり，さらには，そこに示された情報が著作時の現状を正確に反映しているとは限らないからである．実際，前述したように，『黄瑠璃史』所収のジンチ寺座主の系譜は，1670 年頃までの情報しか含んでいない．『黄瑠璃史』所収の諸系譜の著作年を含め，その細かい考察は本稿の主題からは外れるので，別稿にて検討することにしたい．

さらに，この Co ne tshul khrims dar rgyas という人物は，前述したように，ジンチ寺座主に就任する前に，三十歳の年（1651）にセラメ学堂長に就任して，十四年間（1651-1664）在任したことが知られている．実際，セラメ学堂長の系譜を見ると，確かにその名前を確認することが出来る．即ち，『カルナク仏教史』では，その系譜末の人物として登場しているのである[67]．それ故，『カルナク仏教史』所収のセラメ学堂長の系譜は，1664 年頃までの情報を含んでいることが判明する．ちなみに，この人物は，『黄瑠璃史』著作時の座主である Cho rdor tshul khrims dar rgyas から数えて，四代前の座主である[68]．

同様に，ギュトゥ学堂長とシャルツェ学堂長の系譜もまた，1670 年頃に著作されたと推定される．例えば，ギュトゥ学堂長の系譜では，Nyang rong ba rje dge 'dun grags pa までの系譜が記載されているが[69]，下院法主クンチョクチューペルは，実にその九代も前に位置付けられているので，1630 年以降の系譜を含んでいることは疑いない．そこで，この Nyang rong ba rje dge 'dun grags pa という人物のギュトゥ学堂長在任期間を明らかにすることが可能であれば，カルナク翻訳師がこのギュトゥ学堂長の系譜を記した年代を推定することが可能となる．

残念ながら，この人物の正確な年代と事績は不明であるが，『黄瑠璃史』所収のギュトゥ学堂長の系譜では，『黄瑠璃史』著作時現在のギュトゥ学堂長である 'Ol

---

66 『黄瑠璃史』は，奥書によれば，1692 年に著作開始，七年間執筆に要して，1698 年に完成したものである（同書 p. 518, cf. 序文 p. 1）．
67 『カルナク仏教史』p. 90.3 参照．
68 『黄瑠璃史』p. 141.22 参照．
69 『カルナク仏教史』pp. 59.7-60.2 参照．

dga' ba blo bzang chos 'phel の僅か三代前に位置付けられている[70].『黄瑠璃史』所収の系譜の数えでは, 第 25 代ギュトゥ学堂長に当たる. 'Ol dga' ba blo bzang chos 'phel より一代前の sBom/sPom 'bor blo bzang chos 'phel は，1691 年にギュトゥ学堂長に就任し，1698 年頃に第 47 代ガンデン座主に就任したことが伝えられている[71].

さらに dGe 'dun grags pa の一代前の第 24 代ギュトゥ学堂長 Byams pa bkra shis（1618-1684）は，1675 年に第 43 代ガンデン寺座主に就任した人物であり，恐らくその数年前までギュトゥ学堂長を務めていたものと推察される.『黄瑠璃史』によれば，彼は，ギュトゥ学堂長とシャルツェ学堂長を順に務めたとあるが[72],『カルナク仏教史』所収のシャルツェ学堂長の系譜を見ると，丁度，系譜の一番最後にその名前を確認することができる[73]．ところが,『カルナク仏教史』所収のギュトゥ学堂長の系譜では，この人物は，Nyang rong ba dge 'dun grags pa の一代前に見出される[74]．このことは，カルナク翻訳師がギュトゥ学堂とシャルツェ学堂の座主の系譜を記したのは，Byams pa bkra shis がギュトゥ学堂長を退任し，シャルツェ学堂長に就任した後であることを如実に示している.

実は,『黄瑠璃史』を見ると，この Byams pa bkra shis の後を継いで，第 34 代シャルツェ学堂長に就任した人物は，Nyang rong ba/ Nyag re dge 'dun grags pa に他ならない[75]．それ故，この dGe 'dun grags pa は，カルナク翻訳師がこの系譜を記した後で，シャルツェ学堂長に就任したことになる．時系列を整理して示すならば，以下の通りである.

Byams のギュトゥ学堂長退任と dGe の同学堂長就任 → Byams のシャルツェ学堂長就任 → 『カルナク仏教史』の著作 → Byams のシャルツェ学

---

[70] 『黄瑠璃史』p. 101.20 参照．そこでは，Nyag re dge 'dun grags pa と表記されている.

[71] 『雪域辞典』p. 1560 (Yang steng blo bzang chos 'phel の項)では，1691 年にギュトゥ学堂長に就任し，1699 年に第 47 代ガンデン座主に就任したとされる．『チベット史年代便覧』p. 91 にも同様に記されているが，ガンデン座主退任年として，1701 年を追加している．他方，『チベット歴史便覧』p. 183 には，彼のガンデン座主在任期間として，1699-1700 年を挙げている．このうち，まずガンデン座主の就任年については，1698 年に記された『黄瑠璃史』には，当時のガンデン座主としてこの人物が挙げられているので，1699 年就任はあり得ない．1698 年かそれ以前とすべきである．また，彼のシャルツェ学堂長就任年については，『カルナク仏教史』や『黄瑠璃史』にはその年代が明記されておらず，この 1691 年という年代が何に基づくのか不明である.

[72] 『黄瑠璃史』p. 93.2f.参照.

[73] 『カルナク仏教史』p. 55.12f.参照.

[74] 『カルナク仏教史』p. 59.19f.参照.

[75] 『黄瑠璃史』p. 98.21 参照.

堂長退任［及びガンデン座主就任］と dGe の同学堂長就任

（略号：Byams = Byams pa bkra shis; dGe = dGe 'dun grags pa）

ここから，これらの系譜の著作年は Byams pa bkra shis のシャルツェ学堂長在任期間と dGe 'dun grags pa のギュトゥ学堂長在任期間が重なる時期であることが分かる．残念ながら，この二人の各々の学堂長在任期間は不明だが，凡その概算を出しておくならば，Byams pa bkra shis がガンデン座主に就任したのは，1675 年であるので，その数年前，丁度 1670 年前後のことかと推察される．先にカルナク翻訳師がガンデン座主の系譜を記したのは第 42 代座主 Blo bzang don yod のガンデン座主在任期間中（1668-1675 年）と指摘したが，それとほぼ一致している．

以上，1670 年頃に著作されたと推定される一連の系譜を検討したが，その全体像を俯瞰するために，一覧表を提示しておこう[76].

ジンチ寺座主	セラメ学堂長	ギュトゥ学堂長	シャルツェ学堂長	ガンデン座主
中略	中略	中略	中略	中略
省略	省略	Gling smad chos rje dkon mchog chos 'phel [1612-?]	省略	省略
Gling smad chos rje dkon mchog chos 'phel [1620-?]	省略	省略	Gling smad chos rje dkon mchog chos 'phel [1625-?]	省略
省略	省略	省略	省略	Gling smad chos rje dkon mchog chos 'phel [1626-37]
中略	中略	中略	中略	中略
Byams pa rgyal mtshan	Gung ru ba rje nam mkha' rgya mtsho	rTse thang pa blo bzang rgyal mtshan	'Ol kha chu bzang pa rje byams pa rnam	省略

[76] 『カルナク仏教史』及び『黄瑠璃史』所収の各寺院座主系譜の頁数は以下の通りである．
- ジンチ寺：『カルナク仏教史』［152f.］；『黄瑠璃史』［191f.］
- セラメ学堂：『カルナク仏教史』［89f.］；『黄瑠璃史』［141］
- ギュトゥ学堂：『カルナク仏教史』［59f.］；『黄瑠璃史』［101］
- シャルツェ学堂：『カルナク仏教史』［54f.］；『黄瑠璃史』［98］
- ガンデン座主：『カルナク仏教史』［18-52］；『黄瑠璃史』［73-97］

			rgyal	
Blo bzang skyes mchog[77]	Co ne tsha dor ba rje blo bzang dpal 'bar	Co ne tsha dor ba rje blo bzang dpal 'bar	rTsed thang ba rje blo bzang rgyal mtshan	dPal ldan rgyal mtshan
Byams pa rig 'dzin	dGe 'dun 'jam dbyangs	Byams pa bkra shis	Ce ne tsha dor ba rje blo bzang dpal 'bar	Blo bzang rgyal mtshan [1662-68]
Tshul khrim dar rgyas [ca. 1670-?[78]]	Tshul khrim dar rgyas [1651-64]	Nyang rong ba rje dge 'dun grags pa	Byams pa bkra shis	Blo bzang don yod [1668-74]
	Nyang bran blo bzang rgyal mtshan	rTsed thang blo bzang dge legs	Nyag re dge 'dun grags pa	Byams pa bkra shis [1675-81]
	Na kha blo bzang don grub	27. sBom 'bor blo bzang chos 'phel	Co ne tshul khrims dar rgyas	Blo gros rgya mtsho [1682-85]
	gTsang pa blo bzang	28. 'Ol dga' ba blo bzang chos 'phel	sBom 'bor blo bzang chos 'phel	Co ne tshul khrims dar rgyas [1685-91]
	Cho rdor tshul khrims dar rgyas			bSam blo sbyin pa rgya mtsho
				sPo 'bor blo bzang chos 'phel

注意：座主名の後に括弧内に示した年代は在任期間を表す.

この一覧中，五種類の濃淡で網掛けをした部分は，それぞれ同一人物を示している．特に，『カルナク仏教史』の年代考証に関連する五人の人物だけに網掛けしたが，当時，ギュトゥ学堂長→シャルツェ学堂長→ガンデン座主という経路が成立していた事が分かる[79]．二重線で区切った境界までの系譜が『カルナク仏教史』と『黄

[77] この人物は，『カルナク仏教史』所収の系譜には見出されないので，『黄瑠璃史』所収の系譜から補足しておく．

[78] Co ne tshul khrims dar rgyas のジンチ寺座主退任年は不明であるが，『黄瑠璃史』によれば，彼はガンデン座主を退任した後で，ジンチ寺にケンスルとして住したとあるので（同書 p. 95.7f.），ガンデン座主を退任した 1691/2 年以降はジンチ寺座主ではないことが確認される．恐らくは，ガンデン座主に就任した際か，それ以前に退任していたものと思われる．彼のガンデン座主退任年は，『黄瑠璃史』には明記されおらず，『チベット史年代便覧』p. 90; 『チベット歴史便覧』p. 183 に依った．

[79] 現代のガンデン座主の選出過程については，既に，西沢 2011, Vol. 1, p. 683 に紹介したが，具

瑠璃史』に共通して示されており，二重線以下の部分は，『黄瑠璃史』のみに掲載されている系譜である．これは『黄瑠璃史』著作時までの系譜を挙げておいた．この二重線の境界線が『カルナク仏教史』所収の諸系譜の著作年を示している．丁度，第 42 代ガンデン座主 Blo bzang don yod の時代のことであり，その時分には，シャルツェ学堂長は Byams pa bkra shis[80], ギュトゥ学堂長は dGe 'dun grags pa が務めており, ジンチ寺座主とセラメ学堂長は, 系譜を見る限り, Co ne tshul khrims dar rgyas が兼任していたことが分かる．特に，この Co ne tshul khrims dar rgyas は，『カルナク仏教史』の著作後に, シャルツェ学堂長とガンデン座主をも歴任した人物であり，先に言及した下院法主クンチョクチューペルと共に，『カルナク仏教史』の著作年を考証する上でも鍵となる重要な人物となっている．

なお，下院法主クンチョクチューペルは，ジンチ寺，ギュトゥ学堂，シャルツェ学堂，ガンデン座主をも歴任していたので，その名前を系譜中に挙げておいたが，『カルナク仏教史』所収のこれら一連の系譜が彼の時代よりもかなり後の系譜を含んでいることは，この一覧を見れば，一目瞭然である．前述したように，彼は，サンプ寺下院法主，ラトゥ学堂長，ロセルリン学堂長，サンガクカル寺座主等も務めたが，『カルナク仏教史』所収のそれらの系譜は，一律，1630 年頃の著作であることは疑いないので，この下院法主クンチョクチューペルという人物を年代考証の基軸として据えることを通じて,『カルナク仏教史』に収録されている諸系譜は，1630 年頃の記述と，1670 年頃の記述の二つを含んでいることが判明するのである．

同様の年代考証作業はさらに他の寺院の座主の系譜についても継続していく必要があるが，ここではさらに一例だけ紹介しておきたい．それは，チャユル寺（Bya yul dgon/ Bya yul mang ra dgon）の座主の系譜についてである．このチャユル寺は，

体的には，ギュトゥ学堂とギュメ学堂という二つの密教学堂の何れか一方のラマウンゼ（bla ma dbu mdzad）という職位を務めた後，両学堂の何れかのケンポ（mkhan po, 学堂長）を務め，その後，チャンツェ法主（Byang rtse chos rje）ないしシャルツェ法主（Shar rtse chos rje）の地位に就いた後で，初めてガンデン座主に任命される資格を得る．その選出過程は既にこの時代に確立していたことを示唆している．

[80] この人物は，かなり大きな異読が確認される．即ち，『カルナク仏教史』所収のギュトゥ学堂長の系譜では，rGyal me tog thang pa rje byams pa dpal bzang (sic)，同書所収のシャルツェ学堂長の系譜では，rGyal me tog thang pa rje byams pa rgya mtsho (sic)と表記されているが，『黄瑠璃史』では何れも rGyal ba byams pa bkra shis と表記されている．文脈から判断して全て同一人物であることは疑いないので，表記を Byams pa bkra shis で統一しておく．『カルナク仏教史』に見られる表記の相異はテキスト伝承上の混乱と見なすべきである．

著名なカダム・ダムガク派の学僧チャユルワ・ションヌウー（Bya yul ba gzhon nu 'od, 1075-1138）により 1113 年に建立されたカダム派の古刹である[81]．『カルナク仏教史』では，このチャユル寺の座主の系譜は，dBon brgyud ngag dbang byams pa bsod nams bzang po まで記されており[82]，そこまでの系譜は，『黄瑠璃史』でも多少の付加はあるがほぼ逐語的に引き写されている[83]．しかるに，『カルナク仏教史』では，その後で，「現在，ロ［寺］，チャユル［寺］，チェカル寺の者達はサキャ派の法統を保持している」と明記されている[84]．ここで「現在」とは『カルナク仏教史』の著作時を指すが，『黄瑠璃史』では，この記述は見出されず，その後の一連の系譜が六代に渡り記されている[85]．その系譜は，『黄瑠璃史』著作時の座主 sNye bo blo bzang rgyal mtshan で終わっているが，注目に値するのは，その二代前の座主に前出の Nyag re dge 'dun grags pa の名前が見出されることである．この人物は，前述したように，ギュトゥ学堂長とシャルツェ学堂長の系譜にも登場するが，他にも，ロセルリン学堂長[86]，タンキャ寺（Thang skya）座主[87]，イェオ新寺（dBye bo dgon gsar）座主[88]なども歴任した人物である．そして，先の年代考証から，1670 年頃にギュトゥ学堂長を，その後は，シャルツェ学堂長を務めていたことが明らかになっている．その四代前が dBon brgyud ngag dbang byams pa bsod nams bzang po に当た

---

[81] このチャユル寺の寺統は，『カルナク仏教史』pp. 118-119; 『黄瑠璃史』p. 188 に掲載されている．後者では，Bya yul mang ra と表記．

[82] 『カルナク仏教史』pp. 118.3-119.3: ... slar dBon brgyud ngag dbang byams pa bsod nams bzang po de (read: da) ltar bzhug shing/ ...

[83] 『黄瑠璃史』p. 188.7-21 参照．

[84] 『カルナク仏教史』p. 119.9f.: da ltar ni Lo Bya yul ba dang 'Chad kha ba rnams Sa skya pa'i chos lugs 'dzin to//

[85] 『黄瑠璃史』p. 188.20-23: ... slar dBon brgyud ngag dbang byams pa bsod nams dpal bzang po/ sKyid shod ngag dbang rnam rgyal/ gNyal pa nam mkha' bsod nams grags pa/ Tre bo nam mkha' bsam grub/ Nyag re dge 'dun grags pa/ Sog po ngag dbang bstan 'dzin/ da lta sNye bo blo bzang rgyal mtshan/

[86] 『黄瑠璃史』p. 134.18 参照．同史所収の系譜では，『黄瑠璃史』著作時の学堂長である Mi nyag bla zur lha mgon から数えて，三代前の学堂長に当たる．『カルナク仏教史』所収のロセルリン学堂の系譜は，前述したように，1630 年頃までの情報しか記載していないので，この人物は見出されない．

[87] 『黄瑠璃史』p. 170.3 参照．同史所収の系譜では，『黄瑠璃史』著作時の座主 Se ra stod las thog pa ngag dbang nam mkha' skyong から数えて，二代前の座主に当たる．『カルナク仏教史』所収のタンキャ寺の系譜は，Chos rje bshes gnyen grags pa で終わっているが（同書 p. 110.17），この人物は，『黄瑠璃史』著作時の座主から数えて，七代前に当たるので，『カルナク仏教史』所収の系譜は，およそ 1630 年頃の著作と推定される．

[88] 『黄瑠璃史』p. 186.14 参照．同史所収の系譜では，『黄瑠璃史』著作時の座主 'Ol dga' ba blo bzang chos 'phel から数えて，三代前の座主に当たる．『カルナク仏教史』にもこの寺は言及されるが（同書 p. 117.1-3），建立者のみが示されているだけで，寺統は掲載されていない．

る訳だが，この人物の二代前の座主 Mai tri don grub rgyal mtshan は，サキャ派所属であり，1527-1587 年という生没年が知られている[89]．それらの前後関係を鑑みに，dBon brgyud ngag dbang byams pa bsod nams bzang po がチャユル寺の座主に在任していた年代は，1630 年前後に立てるのが穏当と思われる．

そして，もしこの年代考証が妥当であれば，1630 年頃 — これはダライラマ五世が十四歳の年に当たる — には，ロ寺，チャユル寺，チェカル寺という一連の元カダム派の寺院は，サキャ派に所属していたこと，しかるに，その後，少なくても，その中のチャユル寺とロ寺は，ダライラマ五世の治世下においてゲルク派に転向したこともまた判明する．但し，留意すべきは，チャユル寺等がゲルク派へ転向する前に既にサキャ派に所属していたというこの興味深い史実は，『黄瑠璃史』では全く黙殺されていることである．『黄瑠璃史』はかなりゲルク派至上主義的な色彩が強い作品であるので，非ゲルク派的色彩は努めて払拭しようとする傾向にあるが，これはその一例である．

このチャユル寺のみにあらず，ロ寺[90]もその当時ゲルク派の寺院であったことは，『黄瑠璃史』に掲載されているところから分かる[91]．このゲルク派への転向は『カルナク仏教史』所収のチャユル寺座主系譜の著作年である 1630 年頃から『黄瑠璃史』の著作年である 1698 年までの間に起ったことが推定される．チャユル寺の場合，『黄瑠璃史』著作時の座主 sNye bo blo bzang rgyal mtshan より二代前の Nyag re dge 'dun grags pa は既にゲルク派であり，さらに，四代前の gNyal pa nam mkha' bsod nams grags pa も，タシルンポ寺に関わりのある人物であるので[92]，その頃には既にゲルク派に転向していたことが分かる．この人物は，このチャユル寺座主の系譜の著作時（ca. 1630 年）の座主 dBon brgyud ngag dbang byams pa bsod nams bzang po の僅か二代後の人物であるので，この転向は 1650 年前後のことと推定される．これはダライラマ五世が三十四歳頃のことである．

結語：

以上，『黄瑠璃史』所収の系譜と比較対照しつつ，『カルナク仏教史』所収の諸寺

---

[89] TBRC P3508 による．
[90] ロ寺については，井内真帆による研究がある．井内 2010 参照．
[91] 『黄瑠璃史』p. 171f.参照．
[92] TBRC P4511 参照．

院の座主の系譜の著作年を検討したが，そこから，『カルナク仏教史』には，少なくても1630年頃までの記述と1670年頃までの記述という異なる年代の記述が混在していることが明らかになった[93]．本稿で検討した資料を整理して挙げるならば，以下の通りである．

1630年頃の著作	1670年頃の著作
• ダライラマ五世伝	• ガンデン座主（dGa' ldan khri pa）の系譜
• サンプ寺下院（gSang phu gling smad）法主の系譜	• ジンチ寺（rDzing phyi）座主の系譜
• ラトゥ（Rwa stod）学堂長の系譜	• レプリ寺（Sleb ri）座主の系譜
• キョルモルン寺（sKyor mo lung）座主の系譜	• ガリ（mNga' ris）学堂長の系譜
• ロセルリン（Blo gsal gling）学堂長の系譜	• セラメ（Se ra smad）学堂長の系譜
• サンガクカル寺（gSang sngags mkhar）座主の系譜	• ギュトゥ（rGyud stod）学堂長の系譜
• チャユル寺（Bya yul）座主の系譜	• シャルツェ（Shar rtse）学堂長の系譜

ここに挙げた資料は，無論，『カルナク仏教史』に収録されている膨大な寺統の一部にすぎず，同様の作業は，これから継続的に行う必要がある．ただ紙面の制約があるので，ここでは，年代考証が比較的容易な例だけを挙げておいた．今は，『カルナク仏教史』に著作年が異なる複数の層が存在していることが確認できたことでよしとしておく．

最後に，『カルナク仏教史』に混在するこの二つの著作年のズレをどう解釈すべきなのかという点を検討しておこう．これについては，以下の二つの可能性が考えられる．

1．『カルナク仏教史』の著作に少なくても四十年以上を要した可能性．

2．後代の増補を含む可能性．

奥書を見る限り，他の人物の手は入っていないので，仮に増補があったとしても，別人によるものではなく，カルナク翻訳師自身によるものと思われる．その場合，

[93] このことは，情報が入手しやすい大寺院の座主の系譜について言えることであり，地方の末寺の座主の情報は，それよりも古い情報で止まっていることは多いにあり得ることである．一例を挙げるならば，Klung shod dpal 'bar sgang という寺院の座主系譜は，『カルナク仏教史』では，第28代ガンデン座主 dGe 'dun rgyal mtshan までを収録しているが（同書 p. 115.5-9），この人物は，『黄瑠璃史』著作時の座主 Blo bzang phyag rdor から数えて十一代前の座主であり，1532-1607年という年代が知られている．それ故，その『カルナク仏教史』所収の系譜は，1630年以前の古い情報しか含んでいないことに留意する必要がある．

後代の増補といっても，結局は，著作の完成に四十年以上掛かったことと大差はないことになるが，ただ，その四十年間の間に，増補が継続的になされたのか，あるいは, 1670年頃に集中的になされたのかという点は区別されるべきかと思われる．この点は，それ以外の資料をも検討して総合的に判断する必要があろうが，少なくても，今回扱った資料に依る限り，その増補は，1670 年頃に集中的になされた可能性が高い．作中の「現在」は，チャユル寺座主の系譜の箇所で言及したように，1630 年頃を指すので[94]，恐らくはその頃に著作されて，その後，1670 年頃，カルナク翻訳師自身の手で増補がなされたと結論すべきかと思われる．そして，その増補が部分的に留まったため，1630 年頃の記述が多数残存してしまい，ある種のちぐはぐさが生じたものと推定される．あくまで憶測に過ぎないが，何らかのやむを得ない理由により, 完全な増補を断念して中途半端な形で筆を擱いた可能性がある．この点の詳細については，他の関連箇所も併せて検討する必要があるので，別稿を期するが，今は暫定的に，「ca. 1630 年著作（ca. 1670 年増補）」と考証しておく．何れにせよ,『カルナク仏教史』の著作が，1630 年頃から 1670 年頃に至るまでのものであることは疑いない．

最後に, カルナク翻訳師の年代について以上の諸事情を勘案して再検討を加えておこう．彼は，基本的には，ダライラマ四世（1589-1616: 1602 年登位）の時代の人物であり，ダライラマ四世が没した 1616 年頃にその伝記を記していること，下院法主クンチョクチューペル（1573-1646）の直弟子であることを考えると，その生年は 1585 年頃に置くのが穏当であろう.『カルナク仏教史』の最新の層は，所収の五世伝や,『黄瑠璃史』著作時現在と同じ座主を記載するジンチ寺やレプリ寺等の系譜であり，これは先に考察したように，1670 年頃の記述と推定される．1585 年頃を生年とすると，八十五歳頃のこととなる．このように考えた場合，カルナク翻訳師は，恐らくは年齢的な理由から，その完全なる増補を断念したものと推定さ

[94] 1670 年頃までの系譜を含むジンチ寺の寺統にも，前述したように，「最近（deng sang）」や「現在（da lta）」という語が見出される．『カルナク仏教史』pp. 150.6, 151.5, 151.11 参照．但し，これらは，系譜を挙げる前の箇所に見出されるので，必ずしも，系譜著作時の年代を示すものとは受け取れない．つまり，ジンチ寺の寺統の大部分は，1630 年頃に著作され，1670 年頃には，系譜の部分だけ補足した可能性も念頭に置かなければならないのである．ただ，この「最近（deng sang）」や「現在（da lta）」という語は，他の寺統にも散見しており，それらが全て 1630 年頃を指すのか否かは，検証に値する課題である．本稿では紙面の関係上扱うことが出来ないので，この点は今後の検討課題として残しておく．

れる．本書の増補の部分に前述のようなちぐはぐさが見られるのは，それが主な理由であろう．そこで本稿では暫定的に以下の年代を想定しておく．

- カルナク翻訳師の年代：ca. 1585-1670
- 『カルナク仏教史』の著作年：ca. 1630 年著作（ca. 1670 年増補）

この増補は，カルナク翻訳師自身ではなく，第三者が行った可能性も皆無ではないが，カルナク翻訳師と下院法主クンチョクチューペルの師弟関係を念頭におく場合，カルナク翻訳師の生年を，師である下院法主クンチョクチューペルの生年である 1573 年より前に置くことは全く不可能ではないとしても，その可能性は低いと見てよい．この ca. 1585-1670 という年代が妥当であれば，カルナク翻訳師は，下院法主より十歳余ほど年少の同時代人であり，三十二歳の 1616 年頃に『ダライラマ四世伝』を著作，四十六歳の 1630 年頃に『カルナク仏教史』を著作し，八十六歳の 1670 年頃にその部分的増補を行ったことになる．

略号：

MHTL　*Materials for a History of Tibetan Literature,* Part 3. Comp. Lokesh Chandra, New Delhi, 1963.

TBRC　Tibetan Buddhist Resource Center (https://www.tbrc.org/).

チベット語文献[95]：

『アク稀覯書目録』

A khu ching shes rab rgya mtsho (1803-1875), *dPe rgyun dkon pa ’ga’ zhig gi tho yig don gnyer yid kyi kunda bzhad pa’i zla ’od ’bum gyi snye ma bzhugs so*. In: MHTL pp. 503-601.

『黄瑠璃史』

sDe srid sangs rgyas rgya mtsho (1653-1705), *dGa’ ldan chos ’byung vaiḍūrya ser po.* Ed. rDo rje rgyal po. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1989.

『カダム明灯史』

Las chen kun dga' rgyal mtshan, *bKa’ gdams chos ’byung gsal ba’i sgron me*.

[95] 文献の配列はアイウエオ順である．

Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2000.

『カルナク仏教史』

mKhar nag lo tsā ba dpal 'byor rgya mtsho, *dGa' ldan chos 'byung dpag bsam ldong po mkhas pa dgyes byed dang mtshan byang gzhan mkhar nag chos 'byung zhes bya ba bzhugs so*. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 2013.

『クンチョクチューペル伝』

rGyal ba ngag dbang blo bzang rgya mtsho (1617-1682), *'Jam dpal dbyangs chos kyi rje dkon mchog chos 'phel gyi rtogs brjod mkhas pa'i rna rgyan bzhugs*. In: *rGyal dbang lnga pa ngag dbang blo bzang rgya mtsho'i gsung 'bum.* Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009, Vol. 11, pp. 388-413.

『ゲイェ仏教史』

dGe ye tshul khrims seng ge (1428-1474-?), *rGya bod kyi chos 'byung rin po che*. ゲイェ・ツルティムセンゲ『インド・チベット仏教史』 — 校訂テキストおよび影印 —. 大谷大学真宗総合研究所・西蔵文献研究班，2007.

『新旧カダム史』

Paṇ chen bsod nams grags pa (1478-1554), *bKa' gdams gsar rnying gi chos 'byung yid kyi mdzes rgyan zhes bya ba bzhugs so*. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 2001.

『新旧カダム派全集目録』

Klong rdol ngag dbang blo bzang (1719-1795), *bKa' gdams pa dang dGe lugs pa'i blo ma rags rim gyi gsung 'bum dkar chag bzhugs so*. In: *Klong rdol ngag dbang blo bzang gi gsung 'bum*. 2 vols., Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 1991, Vol. 2, pp. 495-638.［活字本］

シャタピタカ本：In: *The Collected Works of Londol Lama*. Part 1, 2, Śata-Piṭaka Series Vol. 100, Comp. Lokesh Chandra, New Delhi, 1973, pp. 1285-1413. [= MHTL pp. 603-696]

『青冊』

'Gos lo tsā ba gzhon nu dpal (1392-1481), *Deb ther sngon po.* 2 vols., Varanasi: Vajra Vidya Library, 2003.

『雪域辞典』

Ku zhul grags pa 'byung gnas/ rGyal ba blo bzang mkhas grub, *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod*. mTsho sngon mi rigs par khang, 1992.

『ダライラマ四世伝』

rGyal ba ngag dbang blo bzang rgya mtsho (1617-1682), *'Jig rten dbang phyug thams cad mkhyen pa Yon tan rgya mtsho dpal bzang po'i rnam par thar pa nor bu'i 'phreng ba zhes bya ba bzhugs so*. In: *rGyal dbang sku phreng rin byon gyi mdzad rnam* 1, (*sKu phreng dang po nas bzhi pa'i bar gyi rnam thar*), Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2010, pp. 580-664.

『チベット史年代便覧』

bSod gnam rgya mtsho/ Nor bu sgrol dkar, *bsTan rtsis ka phreng lag deb*. Mi rigs dpe skrun khang, 2000.

『チベット政治史』

Zhwa sgab pa dbang phyug bde ldan (1908-?), *Bod kyi srid don rgyal rabs/ Political History of Tibet*. 2 vols., 1st ed. Kalimpong, 1976, 5th ed. Dharamsala, 1997.

和訳：『チベット政治史』（貞兼綾子監修，三浦順子訳），亜細亜大学アジア研究所，1992.

『チベット歴史便覧』

Dung dkar blo bzang 'phrin las/ Dar mdo bkra shis dbang 'dus, *Bod kyi rig gnas dang lo rgyus kyi re'u mig ngo mtshar kun snang*. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1997.

『ツォンカパ伝』（カルナク翻訳師造）

mKhar nag lo tsā ba dpal 'byor rgya mtsho, *rJe btsun tsong kha pa chen po'i rnam par thar pa mKhar nag lo tsā bas mdzad pa bzhugs so*. In: *rJe btsun tsong kha pa chen po'i rnam thar phyogs bsgrigs*. 4 vols., Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2015, Vol. 2, pp. 41-53.

『ツォンカパ伝』（ギェルワン法主造）

rGyal dbang chos rje blo bzang 'phrin las rnam rgyal, *'Jam mgon chos kyi rgyal po tsong kha pa chen po'i rnam par thar pa thub bstan mdzes rgyan gcig ngo*

mtshar nor bu'i phreng ba zhes bya ba: 'Jam mgon bla ma tsong kha ba chen po'i rnam thar rgyas pa. Ed. Zhu chen tshe tan zhabs drung, reprint, Varanasi, 2000.

『トゥンカル稀覯書目録』

Dung dkar blo bzang 'phrin las (1927-1997)*, dPe rgyun dkon rigs kyi dpe tho bsdu rub mdzad pa khag cig*. In: *mKhas dbang dung dkar blo bzang 'phrin las kyi gsung 'bum*. Mi rigs dpe skrung khang, 2004, Vol. kha, pp. 165-302.

『トゥンカル大辞典』

Dung dkar blo bzang 'phrin las (1927-1997), *Dung dkar tshig mdzod chen mo*. Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2002.

『ドメ仏教史』

Brag dgon pa dkon mchog bstan pa rab rgyas (1801-1866), *mDo smad chos 'byung*. Kan su'u mi rigs dpe skrun khang, 1st ed. 1982, 3rd ed. 1987.

『バシェー』

sBa bzhed. In: *dBa' bzhed bzugs so*. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 2011, pp. 59-157.

参考文献：

井内 2012　井内真帆，「ロ寺 ― 初期カダム派寺院の変遷 ―」『大谷大学研究年報』62, pp. 39-77.

津曲 2011　津曲真一，『バシェ』訳註（3）― パドマサンバヴァの入蔵 ―『東京大学宗教学年報』28, pp. 219-240.

西沢 2011　西沢史仁，『チベット仏教論理学の形成と展開 ― 認識手段論の歴史的変遷を中心として ―』，全四巻，東京大学, 2011.（国立国会図書館請求記号：UT51-2012-M586；東京大学文学部図書館 請求記号：2011:III:7:4）.

Martin 1997　Dan Martin, *Tibetan Histories: A Bibliography of Tibetan-Language Histrorical Works*. London: Serindia Publication.